

8月12日(日)

ロンドン観光2日目、帰国の途へ

朝、ホテルのレストランで、生徒たちは元気に朝食をしっかりと食べて、ロンドン観光2日目に出発しました。昨夜の天気予報は雨マークでしたが、観光の終了まで何とか天気が持ちました。まず、ガイドさんの案内でウィリアム王子が結婚式を挙げたウエストミンスター寺院、ロンドンのシンボリック存在国会議事堂(通称ビッグ・ベン)などを巡りました。現在、ビッグベンは大規模の修復の為、足場に囲まれている状態です。非常に珍しい光景で、建築マニアも集まってきます。



その後、衛兵交代に間に合うよう、速足で公園を通り抜け、バッキンガム宮殿に向かいました。テレビや雑誌でしか見たことのない景色が!「本物だ!」と興奮している生徒達にガイドさんが、「あそこのバルコニーで王室の人達が手を振ってる様子をテレビで観たことあるでしょう?」と言うと、「見たことある!」と感動していました。さすがは世界中の観光客が集まる場所バッキンガム宮殿、非常に混んでいましたが、赤いジャケットに黒い帽子姿の衛兵の交替式を見ることが出来ました。ロンドンを訪ねる外国人が英国王室の威厳を感じるような、堂々とした行進でした。



次はロンドンの繁華街「ピカデリー・サーカス」でランチを含めて自由時間をとりました。殆どの生徒が紅茶の専門店「Fortnum & Mason」で家族の為、品質の良い本格的な紅茶を購入していました。

最後は、「National Gallery」（国立美術館）を見学しました。イギリス代表の画家ターナーからルネッサンス時代で活躍したレオナルド・ダ・ビンチの作品まで、西洋の美術界は大変勉強になりました。

最後の観光地を見学してから、ヒースロー空港へ移動しました。全員、英国時間 19 時 15 分発の日本航空 44 便日本直行便の手続きを無事終了し、一路ご家族の待つ日本へと飛び立ちました。（羽田空港で、伊丹空港行き便に乗り換えます）

（ 引用： （株）コッツウォルズ ウインドアカデミー公式ホームページ ）

<引率教員あとがき> 2018 年度 夏期イギリス研修を終えて

プログラム全体を通じて感じたことは、英語学習が生徒達の実生活の中に緻密に組み込まれていたということです。英語学習は文法や語彙など知識を学ぶと同時に、その言語が使用されている文化に触れ、実際に使う場面を設定するということが非常に大切だと思っています。

ホームステイをすることで、イギリスの家庭というものを経験しました。兄弟と遊んだり、一緒に買い物に出か

けたり、食卓を囲んで会話を楽しんだり、このような何気ない家族との関わりが日常となりました。

英語の授業では、日本で培ってきた英語力をベースに、ドラマレッスンを始め自己表現をすることに重点がおかれていました。また、自らが興味を持っているトピックについて現地の施設や店舗を訪問するリサーチ活動を行い、最終日のプレゼンへとつなげました。

観光では、インターネットやテレビでは感じることはできない、時には荘厳な空気を数多く経験しました。17世紀に建てられたコツウォルズ地方の家並みは絵本の中に立っているようでした。ホルスト生家、グロスター大聖堂、オックスフォード、大英博物館、ナショナルミュージアムなど、様々な場所を訪れ、「本物」を「自分の目」で見ました。

ミュージカル「レミゼラブル」では比較的小さな劇場の中で、生演奏のオーケストラに圧倒されながら、観客が演劇の世界に引き込まれていきました。自らが劇中に生きているような錯覚さえも覚えました。ヨーロッパでは芸術が庶民の生活の中に溶け込んでいるのかもしれませんが。生徒たちは世界の歴史を勉強したい、という気持ちになったはずです。

コツウォルズ地方は日本でいうと「軽井沢」といったところでしょうか。緑が多く、落ち着いた田園風景は人の心を穏やかにさせる場所です。白夜のように日没は遅く、日本の夏とは異なり日差しはとても柔らかい。芝生の匂いやはるか遠くまで広がる丘陵地は、時間の概念について考えさせてくれます。

この独特な空気が漂うコツウォルズと世界的大都市ロンドンを歩き、2週間という短い期間ではありましたが、十代の多感な生徒たちの「こころ」には強烈な刺激を残したに違いありません。世界を体感し、自己を客観的に見つめ、「私は誰なのか」、「私はどうすべきか」という問いかけを今後の人生に投げかけてくれることと思います。

末筆になりましたが今回のプログラムに関わってくださった、CWA様、現地の英語教員、ホストファミリー、生徒の保護者の皆様に、心より深く感謝申し上げます。